

遊楽祭

三谷市民文化振興財団ニュース



丸岡城

一筆啓上 火の用心
お仙泣かすな 馬肥やせ

表紙の言葉

～本多作左衛門重次～

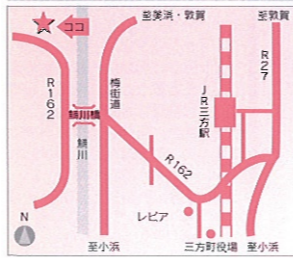
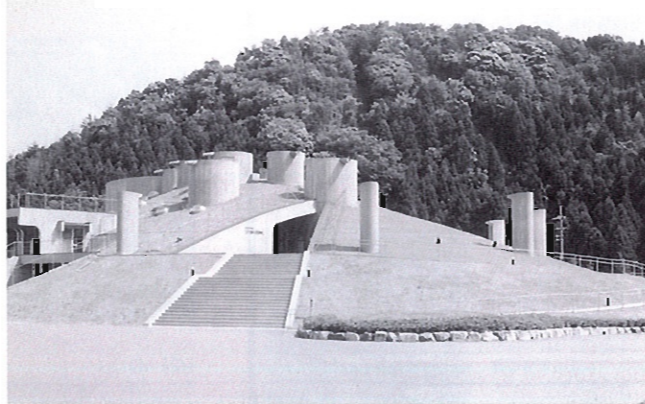
『一筆啓上 火の用心
お仙泣かすな 馬肥やせ』

天正元年（1573）、徳川家康の家臣・本多作左衛門重次が長篠の戦いの陣中から妻に書き送った手紙。「お仙」とは、重次の子・仙千代、後に丸岡城六代目の城主となった本多成重のこと。豪放な武将らしい、ユーモアにあふれた簡潔な手紙は、日本一短い手紙とされている。

「丸岡城」

日本で最古の天守閣を持つ丸岡城。天正四年（1576年）、柴田勝豊（勝家の甥）が北ノ庄城（福井）の支城として築城した城で、別名「霧ヶ城」と呼ばれている。初期の様式の特徴を備えた望楼式天守閣は、国の重要文化財に指定されている。

三方町縄文博物館 DOKIDOKI館



縄文ロマンパーク内にある三方町縄文博物館DOKIDOKI館は、平成12年4月にオープン。館内は、鳥浜貝塚の出土遺物を中心に縄文時代の生活を紹介します。映像によって縄文世界を体感できるコーナーなどの7つのゾーンで構成され、縄文文化を分かりやすく展示している。公園内では、竪穴住居を利用した宿泊体験や土器作りが体験でき、子供と一緒に大人も学んで遊べるスポットだ。

＜お問い合わせ先＞三方町縄文博物館DOKIDOKI館
〒919-1331 福井県三方郡三方町鳥浜第122号12番地の1
電話0770-45-2270

財団法人 三谷市民文化振興財団

〒910-8510 福井県福井市豊島1-3-1 三谷ビル TEL0776-20-3188 FAX0776-25-3911

財団法人三谷市民文化振興財団は、ボランティア活動、スポーツ活動、市民文化活動の支援を目的として作られた財団です。毎年5月に助成団体を広く募集しています。この遊楽祭彩（毎年1回発行）は、県内で活躍する人やグループ、各地で企画されているイベントを紹介し、ボランティア活動、スポーツ活動、市民活動のネットワーク化、活性化の促進を目的としています。
<http://www.milene.or.jp/m-zaidan/>

2001・12月発行

このニュースに関するお問い合わせは、TEL0776-33-7571（株）コミネットまで

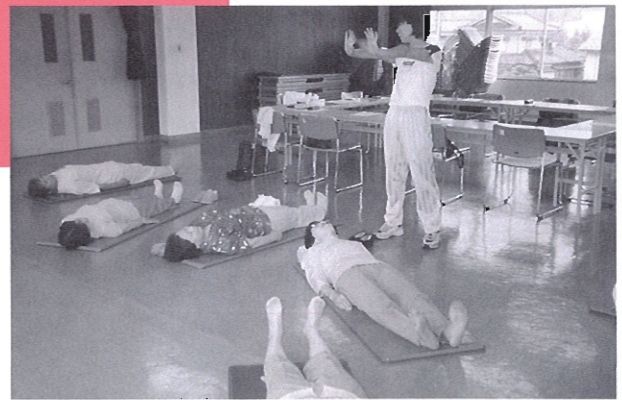
三谷市民文化振興財団の助成団体 様々な場面でイキイキと活動するグループを紹介します。



連絡先 福井市成和2-202-6 五十嵐
TEL 0776-28-5813

自閉症の子供たちは、人と上手くコミュニケーションが取れないことが多い。そのため一人で遊びにいけないことが多い。そこで自閉症や情緒に障害がある子供を持つ保護者たちが集まり、子供たちの社会活動の参加と自立を目的に「元氣っ子の会」を発足。その後、年齢にあう指導を行うため、十五、十九才の子供たちのための「エンジョイクラブ」が新たに加わる。食事を一人で作ること、日帰りや一泊旅行を通じて人の中に出て行動するなど、自立した生活を送れるように、学生ボランティアとともに活動を続けている。「泊二日の東京旅行では、飛行機でもマナーを学ぶ予定だ。」「人と関わることによって、人に対する気遣いも芽生え始めています。何よりも子供たちの笑顔がうれしいですね」と代表の五十嵐さん。「社会に出ると余暇の過ごし方が大切になってきます。ボランティアの人と楽しむのではなく、少しずつでも自分で考えながら外に出て行けるように手助けしたい」と語ってくれた。

社会活動への参加の場を広げ、自立を目指す
エンジョイクラブ（福井市）



連絡先 坂井健康福祉センター
TEL 0776-73-0600

金津膠原病友の会「よつば会」は、膠原病を患う広部さんが、「自分と同じように悩んでいる人がいるのでは。自分ができることはないのだろうか」と思い立ち、一九九三年六月に発足。最初は三人からスタートした友の会も、今では会員が五十人ほどに増えた。難病指定を受ける膠原病は、慢性関節リウマチ、全身性エリトマトーデスなど五疾患の総称。「一時的に体調が回復しても次の日には寝込んでしまうこともあり、毎日が不安でした。でも、泣いても笑っても同じなら、笑顔でいたい」と広部さん。よつば会では、膠原病に関する理解を深めてもらうと専門医を招いて講演会を行った。リハビリ教室や料理教室を開くほか、他のグループとの交流も図っている。活動十年目となる今年、活動の歩みをまとめた「十周年記念誌」を発刊。会員の関係体験や思い、暖かいメッセージが綴られている。「会を通じた様々な人と出会い、自分一人が苦しんでるんじゃないと勇気付けられ、感謝の気持ちでいっぱいです」と広部さんは語ってくれた。

家族や仲間を支えられ、膠原病と共に生きる
金津膠原病友の会「よつば会」（坂井郡）

CULTURAL PRESS

ふくいニューイヤーコンサート2002

1/13 (日) 14:00~
 福井市文化会館 (福井市春山)
 福井市内で活動する音楽家・芸術団体による合同コンサート。ヴァイオリン奏者として幅広く活動する大久保ナオミのヴァイオリン独奏をはじめ、大正琴演奏家の西沢純子とエレガント・ストリングス・アンサンブルの大正琴演奏、高橋雅抄とグループ雅による箏演奏、春山混声合唱団などのクラシック音楽が楽しめる。
 一般1,000円、高校生以下無料
 (問) フルート・ドゥ・バーン
 ■0776-26-2424



ウィーン・リング・アンサンブル

1/14 (月) 14:00~
 ハーモニーホールふくい (福井市今市町)
 ウィーンの新市街をとりまく環状道路「リング」にちなんで名づけられたアンサンブル。コンサートマスターのライナー・キュッヒルを中心に、ヴァイオリン、ヴィオラ、フルートなどのウィーン・フィルのトップメンバー9人のウィーン・フィルの香り高いシュトラウスやランナーのワルツといった名曲が披露される。まさに、ウィーンの名を冠したコンサートだ。
 一般6,000円、小中高生3,000円、ペア10,000円
 (問) チケットセンター
 ■0776-38-8282

福井の 祀り・風習

1

丹生郡越廼村 蒲生・茶崎



アッポッシヤ

2月6日

2月6日の夜、真っ赤な顔に頭には海草を付け、サックリを着て、ミノを付けたアッポッシヤが、茶釜のフタを叩きながら小さな子供のいる家を通ると言う古くからの風習。「悪いことをすると食うぞ」と威嚇して歩く、子供たちは「悪いことはしません」と言って餅を差し出して難を避ける。
 「アッポ」とは餅のことで、「アッポ欲しヤ」というのが、いつしか「アッポッシヤ」と呼ばれるようになったという。

劇団民藝「払えない? 払わないのよ!」

1/23 (水) 18:30~
 鯖江市文化センター (鯖江市東鯖江)
 イタリア喜劇作家ダリオ・フォの代表作を、大瀧秀治や奈良岡朋子などの大御所たちが熱演する抱腹絶倒の喜劇。不景気が続くイタリアではリストラの嵐が吹き荒れ、庶民の暮らしはどん底状態。奈良岡朋子扮するアントニア主婦たちはスーパーに押しかけ、食料品を持ち去ってしまった。警察や葬儀屋、義父を巻き込んで大騒動が始まる。
 S席4,000円、A席3,000円、高校生以下1,000円
 (問) 鯖江市文化センター
 ■0778-52-7430



桂三枝独演会

1/27 (日) 15:00~
 ハートピア春江 (坂井郡春江町西太郎丸)
 落語家としてはもちろん、テレビラジオの司会でも不動の地位を築き、小説や新聞のコラムなどの執筆活動も意欲的に取り組む桂三枝。タレント落語第一人者でありながらも新しいものに敏感な桂三枝が、愛弟子桂三若と桂三歩を引き連れて、巧みな話芸をたっぷりと聞かせてくれる。
 一般3,000円、高校生以下2,000円
 (問) ハートピア春江 ■0776-51-8800

新春午歳名品展

2/1 (金) ~3/17 (日)
 敦賀市立博物館 (敦賀市相生町)
 2002年の干支である「午」にちなんだ作品、その他の十一支に関連した作品を館蔵品を中心として一堂に公開する。歴代品からは馬が描かれた中島来章筆「三国志武将図」を展示する。また、猿を描くことに関して「猿仙の猿」といわれるほど有名な日本画の大家・森田仙の「藤下猿図」(掛け軸一軸)も見ごたえある逸品だ。
 一般200円、小中高生50円
 (問) 敦賀市立博物館 ■0770-25-7033



米谷清和展

3/1日 (金) ~3/24日 (日)
 福井県立美術館 (福井市文京)
 戦後の日本画壇に圧倒的な存在感を示していた横山操に師事し、次代の日本画界を担う一人として活躍している日本画家米谷清和。福井市出身である米谷氏の初の本格的回顧展で、寡黙な群像や鮮烈な風景、そして実験的な心象など、日展、横の会展、個展などで発表された大作を中心に初期から最新作までの100点を展示する。
 一般800円、大高生500円、小中高生300円
 (問) 福井県立美術館 ■0776-25-0451

福井の 祀り・風習 2



坂井郡丸岡町 長畝

日向神楽

9月14日・15日

八幡神社の秋祭りに奉納される日向神楽は、岩戸神楽とも呼ばれ福井県の指定無形民俗文化財に指定されている。
 元禄8年(1695)、丸岡藩主有馬清純が日向国(宮崎県)から越後国(新潟県)に転封、さらに丸岡に国替えになった際、神楽の舞人を同伴したのが始まり。
 演目は「天照大神神楽」、「道祖神舞」など24番にのぼり、日向神楽の伝統を受け継ぐ地元の人たちが、すずや剣、扇などを用い舞を上演する。

朝倉氏遺跡学習講座8「一乗谷の石仏」

3/2日 (土) 14:00~15:30
 一乗谷朝倉氏遺跡資料館 (福井市阿波富町)
 一乗谷朝倉氏遺跡は、戦国時代の城下町跡として400年の歴史をもつ史跡公園。史跡以外にも笏笏石製の石仏をはじめ、一石五輪塔や井戸桁、手水鉢などの石造物が数多く残っている。これらの石造物を含め地域周辺に遺存する石造物について、特色や時代背景、他地域との関わり、さらに石造物の見方などを分かりやすく解説する。
 (問) 一乗谷朝倉氏遺跡資料館
 ■0776-41-2301

オペラ「魔笛」inふくい

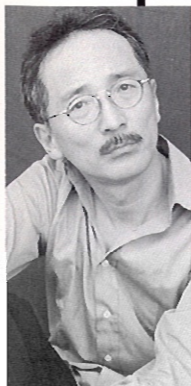
3/2日 (土) 19:00~
 3/3日 (日) 14:00~
 ハーモニーホールふくい (福井市今市町)
 今や日本各地からひっぱりだこのオペラ演出家村歌一が、福井県内のアーティストたちと創りあげるモーツァルト・オペラ「魔笛」。王子タミーノは、悪人ザラストロに捕らえられた夜の女王の娘パミーナを救出するため、ザラストロの国へ旅立つ。お笑い芸人桂小米朝の切れ味のよいナレーションや、福井県出身の吉田浩之のオペラソロも必見!
 一般4,000円、小中高生2,000円
 (問) チケットセンター
 ■0776-38-8282

劇団四季ファミリーミュージカル

「人間になりたがった猫」
 3/3 (日) 18:30~
 ハートピア春江 (坂井郡春江町西太郎丸)
 猫の目から見た人間の世界の怖さと素晴らしさを通して、生きることの尊さを語りかけるファミリーミュージカル。魔法使いのステファヌス博士と一緒に暮らす猫のライオネルは人間の社会に憧れを持ち、人間になりたがっていた。魔法で2日間だけ人間の姿に変えられたライオネルは、ブライドフォードという街へでかけるが…
 一般4,000円、中学生以下2,500円
 (問) ハートピア春江 ■0776-51-8800

ミュージック in かみしひ

「上田正樹コンサート」
 3/9 (土) 18:30~
 上志比文化会館サンサンホール (上志比村石上)
 「上田正樹とサウストウ サウス」で70年代のバンドブームの頂点にたち、その後ソロとなり「悲しい色やね〜 OSAKA BAY BLUES」がスタンダードナンバーとなった上田正樹。近年、アジアのトップアーティストたちとコラボレーションするとともに、インター



ナショナルなアルバムセールスが注目される彼のソウルフルなボーカルと独特なステージをお楽しみに。
 一般3,000円
 (問) 上志比文化会館サンサンホール
 ■0776-64-3170



春のちびっこまつり

4/21 (日)
 きのこの森 (大飯郡大飯町鹿野)
 大飯町の特産「きのこの」ミニテーマパーク・きのこの森では、子どもたちがワクワクするようなイベントを開催する。きのこの森内の川で網や素手で魚を捕まえる魚つかみ大会や、手作りの凧を広場で飛ばす凧作り教室などが体験できる。また、広場でフリーマーケットやバザー、特産品の販売が行われる。ファミリーで楽しめるイベントだ。
 一般・高校生以上200円、3歳以上100円
 (問) きのこのしり館
 ■0770-78-1713



武生国際音楽祭2002

6/9 (日) ~6/16 (日)
 9日・16日: 14:00~
 10日~15日: 19:30~
 武生市文化センター (武生市高瀬)
 ピアノやギターなどのソロから桐朋学園オーケストラまでと、さまざまな編成による多彩な音楽祭。世界各国の音楽祭ディレクターや評論家、作曲家たちの推薦による若い世代の作曲家たちが、武生のために書いた新作を初演する。ワークショップでは、音楽監督の細川俊夫と共に、国際的に活躍する作曲家ベアート・フルーや望月月が招待される。
 (問) 武生市文化センター
 ■0778-23-5057



●プロフィール

にしざわじゅんこ / 1946年福井県生まれ。36歳の時、独学で大正琴を始める。1989年に西沢純子大正琴スタジオを設立し、奏法の開発、楽器の改良等を行いながら積極的な演奏活動を行っている。2001年、作詞・作曲からプロデュースまで全て福井人の手によるCD「幻想曲「飛翔」」を発売する。



弦楽器として大正琴の可能性を追い続ける
 西沢純子 NISHIZAWA JUNKO

大正琴は、その名の通り大正元年に考案された楽器。現在も中高年を中心に愛好者も多い。丸岡町に住む大正琴奏者・西沢純子さんは、邦楽からラテンまでジャンルにとらわれず、従来のイメージを一新させ、常に新しいスタイルに挑戦している。
 趣味として大正琴を始めたのが三十六歳の時。古賀メロデーに代表される従来の音に納得がいかず、独学で勉強を始める。「自分で新しい音を模索し、作ることが楽しく無我夢中でした」。メヌエットや演奏など新しいジャンルにも挑戦し、大正琴の異端児として注目されるようになる。七年間の地道な活動で個人リサイタルも成功させるが、「孤軍奮闘し続けて疲れたんですね。独学での限界も感じていました」と活動休止を決意。
 そんな時に声をかけてくれたのが音楽監督の三寺幸雄氏だった。「大正琴はいまだに未開拓の世界。弦楽器としての大正琴の音色を一緒に改革していかないか」。
 平成元年に三寺氏と作曲・編曲を担当する奥下順三氏と共に「西沢純子大正琴スタジオ」を設立する。奏法、楽器の改良・開発、演奏形態の追求、作曲・編曲等の研究に明け暮れる。
 ピックの持ち方や角度、弦の振動のさせ方で音が大きく変化する。微妙な指の動きが音に様々な表情を与えていく。大正琴は約二オクターブという狭い音域しかでない。逆にその特徴を生かして、音階の違う楽器を使い大正琴だけの七重奏も可能だ。演奏スタイルにもこだわった。「今までのイメージを一新したい」と立奏スタイルを開発、その立奏スタイルを確立し、全国に流行させるほどのインパクトを与えた。現在は、ソプラノ・アルト・テナール・バスの四種類の立奏スタイルを用いた十一部合奏に打楽器を加えた編成で演奏活動を行っている。
 三年前、アマチュア演奏家の登竜門と言われる「アマチュア室内楽フェスティバル」への出場を果たし、本格的なアンサンブル演奏で会場より大絶賛を浴びた。「弦楽器として大正琴が認められたと実感しました」。西沢さんから笑みがこぼれた。
 更なるステップアップには楽器構造の向上が必要不可欠。「改良・開発が進めば、もっとう音が出るといい」と表情を引き締める。「究極の弦の響き、そして体の中から音符が発せられるような演奏を追及していきたい」。彼女の情熱は、大正琴の世界をさらに変えていくだろう。